

野辺送り

中村 千代子

幼稚園から走って帰ると、父と母は庭いっぱいまに靄を干していた。

「うちなあ、お遊戯会で絵日傘を踊るんで。あしたから赤いべべ持って行かないかんわ」  
母に跳びついて言った。父もニコニコ笑って頭を撫でてくれた。

その晩、父は私を膝の上に乗せると顔をのぞき込むようにして言った。

「あんなあ千代子、うちは貧乏やけに赤いべべがないんじや。父ちゃん、あした幼稚園に行つて先生に千代子の踊り変えて貰うわ」

私は、「いやや」と叫んで隣の部屋に駆け込み、いつまでも泣いていた。

翌日は、父に手をつながれて幼稚園に行った。

「千代子ちゃん、かわいい魚屋さんを踊ろうね。青い法被はっぴ着て、豆しぼりするんよ」

先生がブランコを押してくれながら言う。昨夜泣いたのはもう忘れ、私は元気いっぱい魚屋さんになって踊っていた。

母が亡くなったのは、お遊戯会が済んで十日も経たない寒い朝だった。風邪をこじらせ一夜入院しただけのあつけない死であった。

野辺送りには、赤い着物を着せてもらい、一番上の姉に手を引かれてついでに行った。

「この赤いべべ、どうしたん？」

姉に聞いた。

「赤いべべ着とったら、お母ちゃん喜ぶやろ」

姉は涙を流しながら言った。当時、女の子は赤い振袖で葬儀に参列する風習があった。

私は赤い着物を着たのが嬉しくて、飛び跳ねながら行列について行った。山の麓の火葬場は木々に覆われて薄暗い。母の柩は、藁を積み薪を組んだ上に逆さまに置かれた。

「逆さまにしたら、お母ちゃん、頭が痛いやろ」

私は、父にすがりついて泣いた。

藁束に火がつけられ、北風にあおられた炎は、あつという間に母の棺桶を包んだ。

その晩、二人の兄と二人の姉は寒い六畳間で抱き合って泣いていた。父は座敷で母の遺骨を見ながら酒を飲んでいいる。私は赤い着物を着たまま、みんなの顔をうかがっていた。もう、母は帰って来ないという事など分かっていなかった。

「お父ちゃん、うち赤いべべ着とるけに絵日傘を踊ろうか。覚えとんで」

酒臭い父の顔をのぞき込みながら言った。

「ほうか、覚えとんか。ほんだら、踊ってくれ。父ちゃんが傘を取って来てやるけんの」

父は破れた番傘を持ってきた。私は自分で絵日傘の歌を歌いながら、座敷中を駆け回った。大きな傘に足をとられながら、何度も何度も踊った。

父は私を抱き寄せて独り言のように言った。

「こんなことになるんなら、早よう着物を買ったら良かったのう。お母ちゃんにも、絵日傘の踊りを見せてやれたのにのう」

いつも賑やかな座敷は物音ひとつしなかった。

父は、私の結婚式を二カ月後に控えた夏の暑い日に母のところに行った。

母の野辺送りをした時、私の手を引いてくれた姉は八十七歳になり、遠い福岡で暮らしている。

「みんなと遠く離れて寂しいわ」

よく電話がかかる。

十六歳違う姉に、以前から聞いてみたいことがあった。母の野辺送りで着た赤い着物のことである。

「あの着物を用意するの大変だったのよ」

姉がゆっくり語り始めた。

お母さんが急に亡くなり、あんたに着せる着物のことを、長尾の叔母さんに相談したのよ。一晩で用意しないといけないから慌てたわ。あちこちの呉服屋さんを訪ねて……。

「叔母さんのお陰でどうにか間にあってね。お父さんはお金が無くて、私の貯金で払ったのよ」  
姉は、私を傷つけまいと気を遣いながら話してくれた。父の酒臭い息を思い出した。強い北風が吹きつけた野辺送りの景色も浮かんでくる。白い行列の中ほどを担がれていく丸い母の柩。草の小道にリュウノヒゲの実が瑠璃色に輝いていた。母とよく歩いた坂道の曲がり角には、ひとかたまりの黄色い小菊が揺れていた。

まだ五歳だったのに、どうしてこんなに覚えているのだろう。不思議でならない。

あの時の赤い着物はどこへ行ったのだろう。いつ無くなったのかも分からない。

野辺送りをした坂道や山裾は削られ、広い幹線道路が走っている。火葬場だった傍らで眠る父と母。もうすぐ寒い冬が来る。

母のとんかつ

長友 和久

貧しい家庭に生まれ育った僕は、幼い頃に肉を食べた記憶がほとんどない。鳥の唐揚げのような贅沢品には、年に数回、誕生日などしかお目にかかる機会がなかった。ある日、食卓について僕は目を見張った。兄の席にだけとんかつが並んでいたのだ。母に視線を向けると、

「明日は大事なお兄ちゃんの高校入試だからね、げんかつぎだよ」

げんかつぎだろうが何だろうが、僕にとっては鼻肩以外の何物でもない。恨みがましい視線を母に向けても、母は素知らぬ顔だった。数年後、僕が高校受験を迎えた時、当然僕にもとんかつが出てくるのだろうと思っていた。しかし、食卓にはとんかつはおろか肉すらない。

「とんかつは？明日は僕の受験だよ」

「今苦しくてね、これが精一杯だよ」

「お兄ちゃんの時はあったじゃない」

「お兄ちゃんとお前は違うんだよ。いやなら食べなくていい」

すげなく答えた母は、目を合わせようとしなかった。お兄ちゃんと僕は違う。僕は大事ではないということだろうか。目の奥がじわりと熱くなって、そこから悔しさが全身に広がった。僕は悔しさを飲み込むようにご飯をかきこんだ。このことがきっかけで、僕と母の間には溝ができた。あのとんかつは、母が僕より兄を愛している何よりの証拠だと思った。

高校を卒業して家を出てからというもの、僕はろくに実家に帰ることもなくなった。結婚し、初めての子供が生まれた頃、母が入院した。末期がんだった。積極的な治療はせず、緩和ケア病棟で過ごしたいというのが母の希望だった。父もすでに他界していたため、家の管理は兄と僕が引き受けた。母が亡くなった時のことを考え、少しずつ荷物を整理した。ある日、押し入れの整理をしていると日記帳が出てきた。プライドの高い母らしい、子育てや家庭への自信に満ちた内容だった。ところが、後の方の日記を読むと様子が違う。読み進めるうちに、僕への謝罪が綴られているのを見つけた。少なからず母が傷ついていたことも。僕の前では決して弱い顔を見せなかった母。決して謝罪することもなかった母。母が長い間、どんな思いで僕に接していたのか、僕は知らなかった。いや、知ろうとしなかった。いつの間にか僕は泣いていた。長年心にたまっていた悔しき、歯がゆさ、無力感が涙に溶けて消えていった。僕はどれだけ母を苦しめたのだろうか。せめて、母の残された日々にやさしくしよう、そう思った。そんなことで償えはしなくても。その日から僕は変わった。過去を変えることはできなくても、新たな後悔を積み重ねたくはなかったからだ。母と一緒に過ごす時間を増やし、話に耳を傾けた。

ある日、母に退院が許された。といっても一日だけだ。残された時間が少なくなり、体力的にも家に帰る最後のチャンスだった。母は一人で過ごさせて欲しい、と希望した。その日の夕方、母から電話があった。話したいことがあるから一人で来て欲しい、という母の言葉が、僕を急がせた。家に入ると、いいにおいが玄関まで漂っていた。（このにおいは……）食卓には、僕が来

る時間に合わせて揚げてくれたのだろう、できたてのトンカツが並んでいた。言葉が出なかった。病に冒された母がトンカツを作ることがどれだけ大変だったか。

「さあ、温かいうちに食べよう」

やせて衰えてはいたが、その表情は昔のままの母だった。自信家で、どこか得意気な母。言われるままに席に着いた。サクリとした衣。柔らかい肉。よくしみた味。料理上手な母の、愛情がこめられたトンカツだった。食べながら涙が止まらなかった。こんなにもおいしいトンカツがあったなんて。泣きながら僕は母に詫びた。ずっと母を傷付けてきたことを。

「いいんだよ、いいんだよ」

そう言いながら母も泣いていた。僕は母の涙を初めて見た。母に弱さを見せまいとしてきた僕だが、それは母も同じだったのかもしれない。トンカツのためにできてしまった母との溝は、トンカツのおかげでうまった。その日から母の最期の日まで、僕たちは心穏やかに過ごすことができた。

結婚した今、料理上手な妻はおいしいトンカツを作ってくれる。それでもあの日食べたトンカツよりおいしいものにはいまだに出会えない。

「お父さんはもっとおいしいとんかつを食べたことがあるんだよ」と、いつか家族に教えてあげたいと思っている。

ものたま

西川 勝美

祖父は、小さな自転車屋を営んでいた。それは、市内のはずれの、戦前に建てられた家や長屋がまだたくさん残っていた古い通りにあった。中に教台の値段の張られた自転車があれば、店とは気付かれないほどささやかな間口で、晴れた日はいつも小さな椅子を出して、祖父は近所の人達と楽しげに談笑しているのだった。

「これ、直るやるか？」

手先が器用だった祖父は、自転車の修理だけでなく、常連さんに頼まれば、時計や首飾り、刃物研ぎまで、色々な物を直しては手間賃をもらっていた。

「本職やないので：それでよかったら、見させてもらいます。」

祖父はいつも、齒のない笑顔を見せて、快く引き受けていた。時間のあるお客には、自慢の古いミルで挽いたコーヒーを点でて、一緒に飲みながら、何やかやと世間話をしつつ手を動かした。

「おじいさんはな、今でこそ、こんな穏やかだけど、現役時代は仕事の鬼やったんやで」

祖父の若い頃を知る古い友人が、からかうようにそう言うと、祖父は『またか』というような顔をして、それでも何処か懐かしそうな感じで、いつもこう答えるのだった。

「日本が大きくなる時期に働いたからな、役に立つものを作ろうと頑張って、作れたと思つたら、すぐまた古くなってしまったよ。」

「古い物を捨てて、新しい物を作り続けたんだ。それが働くということだったよ。」

「どんどん捨て続けて、気がついたら私が古い物になって捨てられたというわけさ。」

そこまで言うと、お決まりのように、祖父とその古い友人は声を上げて笑うのだった。

私はなぜか、この掛け合いが好きで、祖父が『と、いうわけさ』と言う瞬間を、毎回わくわくしながら待った。

「食い物にも、うなぎのタレとか、糠味噌とか古い方が良い物があるんだから、人間もそういう物にならなくっちゃな。」

「俺は、何でも古い物を修繕して、生き返らせてるあんたの第二の人生を、とてもかっこいいと日頃から尊敬しているんだ。」

そんなことを言いながら、その古い友人は、祖父のとびきり上等なコーヒー豆をいつも自分で挽いて、二杯も飲むのだった。

物を修理している祖父を見るのが好きだった。店の奥にあるソファーに寝そべっていた私は、時々祖父が独り言を言うのを聞いた。

「あれ、もう引退したいのかい？お前さんが直るのを、ご主人は待っていると思うよ。」

「もう少し頑張ってくれるね、ありがとう。まだまだ現役だよ。美人さんだ。」

祖父は修理をしていた物に語りかけていた。

「物には心が無いのよ。おじいちゃん変ね」

私が言うと、祖父は笑うように目を細めて、

「そうか？中には、喋る物もあるかも。」

「古い道具で、人の想いのかけらが残っている時や、色んな経験をして、心を持ってしまったらしい物がね、たまに『早く直して下さい』とか『直りたくない』とか、『ご主人の所に帰りたい』と、話し掛けてくることがあるんだよ。」

「変なの。きつとおじいちゃんにだけね。」

「わしは『ものたま』って、勝手に呼んでいるがね。」

「ものの魂っていう意味？変な名前：」

祖父は微笑んで、ごしごしと頭を掻いた。それからまた預かり物の『杖』に目を落した。

「初めてものたまの声を聞いたのは、指輪を直そうとした時だったよ。若い頃に亡くなった私の前の奥さんの指輪をね、直して、お前のお祖母さんにあげたかったんだ。お金が無くて、新しいのが買えなかったからね。」

「指輪が？何て言ったの？嫌がったの？」

「いや。ごめんね、ごめんねって。繰り返していたよ。前の奥さんは長く病気で、華奢な人だったから、お前のお祖母さんの指に合う様に大きく伸ばしたんだ。それをあげてすぐに、何年も出来なかった赤ん坊、お前の父さんが出来たんだよ。」

祖父は、修理していた『杖』から目を離さずにそう言った。そして、天国の祖母にこの事を内緒にする代わりだと言って、いつもより多めの小遣いをくれた。

「今日はここに泊まるよ。『杖』を早く仕上げなくっちゃいけない気がしてね。」

そう言うとき、祖父はまた熱心に修理を始めた。

祖父の所に『杖』の持ち主が来たのは、それから二日後だった。

「入院したときは、もうだめだと：『杖』も使えなくなるって覚悟したんです。でも結果が良くって。『一か月は：』と申し上げておりましたのに、こんなに早く：。」

「早く来られるような気がしておりました。」

祖父はそう言うとき、その美しい白髪の女性のためにコーヒーを点て始めた。

二人静

小松 菜生子

母が、生まれてからずっと住み続けていた土地と家を離れて、同じ県内のケアハウスに入ってから、もう八年が過ぎた。県外に住む私は、毎年二月の誕生日と母の日に花を贈ることにしている。フラワーショップで「春らしい色あいにして下さい」「それから目が悪いのでどこどころにはつきりした鮮やかな色も混ぜて下さい」と頼む。花に添えるカードを見た店員が「まあ、ご長寿ですね！」と驚くのもいつものことだ。母は花を贈ると一番喜ぶ。ホームの近くに住む二番目の姉(私には兄が一人、姉が四人いる)によると、いつも「綺麗だねえ、綺麗だねえ」と飽かず繰り返していたそうだ。

ところがある年のこと、母の誕生日から数日経って、姉から電話があった。母に代わってお祝いのお札を言ってから、姉は少し言い淀んだ。

「……もうね、お花を贈るのは無理だと思うの。お母さんねえ、お花をむしって口に入れちゃったんですって」

「食べた……？」

そうか、ついにそうなってしまったか……。

でも、仕方ない。九十八歳だもの。もうすぐ百歳だもの。気を取り直す。

「じゃあ、これからは口に入れても大丈夫な物にすればいいのね？」

そう、それもあまり分量がなくて喉につかえないものが良い、と姉は言った。

「そうすると、和三盆とか？」

「そうね『二人静』なら大丈夫だと思うわ、ごめんなさいねえ」自分のせいでもないのに姉は申し訳なさそうに言った。

春になって母を訪ねた。綺麗な丸い箱に入った和三盆のお菓子を持参した。背骨の圧迫骨折と手首の骨折を経て、車椅子を使うようになった母にお土産を渡すと、早速、丁寧に包装の紐をほどき始めた。

姉が母の耳元で私の名前を連呼してくれる。せつかく遠くから来るのに顔を忘れられていたら気の毒だと思うらしい。

「分かったかしら……お菓子の方へ気が散っているわ」

「いいのよ、分かっても分からなくても」

我ながら達観したものだと思うが、もう菜生子と認識してくれなくてもいいのだ。誰かが訪ねて来て嬉しい、それだけでいいのだ。

丸い小さな箱の中に、小指の先ほどの紅白の半球を合わせた一粒が、薄紙にキャンディーのように包まれている。ようやく蓋を開いて、母は一粒を口に入れた。にっこり、する。

と、もう一つ取って、私の前に置いた。

「どうぞ！」

姉の前にも一つ置く。

「どうぞー！」

「有難うございます、頂きます」

まるで「ままごと」である。

「お行儀がいいのは相変わらずだわ」

安心したように、姉がお茶をいれ始めた。

母は末っ子の私を随分可愛がってくれた。

でも、どうもお互いが相手に求めることが食い違っていた。母は本当に善良な人なのだが、申し訳ないことに、私には物足りないのだった。それは母にしても同じだったと思う。

おそらく早くに別れた父親似の私は、母の常識では理解不能な、ややこしい子どもだったのだろう。どちらが悪いのでもなく、ただタイプが違うだけなのだった。

八ヶ岳を遠くに眺める日当たりの良い母の部屋。室内は物欲が薄い母らしくすっきりしたものだ。兄嫁が編んでくれた明るい水色のカーディガンが、真っ白になった母の髪によく似合っている。

お菓子の箱を開けたり閉めたり「作業」に余念が無い母の傍らで、久しぶりに会った姉と私は、話が尽きない。ふと、母が小さい声で何か言いかけた。

「え？」と姉が聞き返す。

「こういうふうに、皆が笑っているのが、いいねえ」

娘二人は驚いて顔を見合わせた。

ごくたまに、母の頭の霞が晴れる瞬間がある。雲が切れて一瞬の陽射しが煌めく時が。

姉は慌てて小さなノートを取り出した。こういう時の言葉を書き留めているのだそうだ。

書いている間に、また霞がかかってしまい、母は澄ました顔で、早くも四つ目か五つ目の粒を口に運んでいた。私もつられるように一つ食べた。口の中で和三盆が、とろりと溶ける。

母と私は、もうお互いに要求することも期待することも、ない。親子であることさえ、あまり関係ない。ただ、今の瞬間、同じ場所に生きて在ることを感じるだけ、それで充分なのだ。そう

「皆で笑っている」だけで。

『二人静』は淡い甘さを残して、すぐに溶けてなくなってしまふ。母と過ごすこのひとときも、また……。そう思うと勿体なくて、出来るだけゆっくりと、舌の上で転がしていた。



つながる星空

菊田 智史

その報せを受け取ったのは私がハワイ島マウナケア山で銀河を観測している時だった。

マウナケア山はその晴天率の高さと宇宙との近さによって世界中の観測天文学者が集まる聖地となっている。人間の生活による影響のない手付かずの夜空に広がる星々は、この世のものは思えないほど美しい。私も天文学者として観測のためにこの山を訪れていた。

観測二日目。目覚ましを止めてカーテンを開けると、西陽が薄暗い部屋に差し込んできた。標高二千八百メートルの酸素の薄さと眠気とに沈んでいた意識が、山際をかすめる朱い日のまぶしさに徐々にはつきりしてくる。天文学者の長い夜が、日没とともに始まる。

山頂へは車で向かう。オフロードを四輪駆動車がたがたと、標高四千二百メートルの高みまで駆けていく。刻一刻と茜色から深い紺青に変化してゆく空に急かされながら観測準備を進める。天候は晴れ、風も月明かりもない最高の条件で観測が始まった。観測対象は百億光年先にある銀河。何万光年もの広がりをもつ銀河を発ち、膨大な空間を旅してきた微かな光が、ごくちつぽけな検出器上に像を結んでいるというのは、にわかには信じがたい壮大な事実である。私とその銀河とは、相対論の言葉で言えば確かに因果的につながっているはずなのだった。

観測中にその報せが届く。このIT時代においては、いかに宇宙に近い場所といえどもインターネットの光から逃れることはできない。母からの「ライン」でのメッセージだった。

「一郎が都内で倒れたわ」

「いまから浜松町の病院に行くわ」

一郎、私の父が倒れたという。銀河からの信号と同じくらい現実味が感じられないでいると、親戚たちの心配する声が矢継ぎ早にパソコンの画面の隅に表示される。一部の親戚までを含んだグループラインというものだ。事態を飲み込む余裕もなのまま、私は観測のためのコマンドの確認を続けるほかなかった。ハワイ時間午前三時、日本時間では午後の十時ごろのことである。

一息つけたのはその三時間以上後になった。日はすでに昇り、青空と薄雲のなかに爪の先のような頼りない月を視界の隅に認めた。しかし意識はそこで途切れた。

目を覚ましたのは午後二時ごろだった。開けたままのカーテンから差す光がほこりを照らし、虹色に輝いて舞うのをぼんやりと見ていた。良くない夢を見たあのような気分だ。机に向かいパソコンを開くと、未読のメッセージが一〇〇件以上溜まっていた。母は病院に駆けつけ、そのままそこで夜を明かしたようだった。

「三日目がきれいだったわ」

父の様子を克明に語った一連のメッセージの最後に、そんな一文があった。処理しきれない多くの情報のなかで、私にはその一文だけ違う色に見えた。今思えば母が見た月は、正確には三日月ではなく二十六夜月だったはずだ。それは私がマウナケアを下るときに見送った、あのうすい月と同じものだった。この空は確かに日本までつながっているようだった。

ハワイにいる自分が東京で意識を失った父にしてやれることを何一つ思いつけないまま帰国の日を迎えた。ハワイから日本が、銀河よりも遠く感じられた。太平洋上空、マウナケアよりはるかな高みの高度一万メートルで、ただ呆然と行く末を案じていたのを覚えている。

初めて見舞いに駆けつけたときには父の意識はまだ戻りきっていなかった。とにかく生きてはいる。ようやく安心できた。狭い病室の一角には、白やオレンジのコスモスの花が挿されていた。誰かの見舞いの品ということだった。コスモスの花の中心には、よく見ると無数の星が敷き詰められている。星型に見えるこの部分も、実は花卉の一部らしい。コスモスという名前も星を散りばめたその姿も、銀河を連想させた。秋とは、天文学者にとつて銀河の季節でもある。天の川の濃い部分が沈み、さらに奥に広がる銀河を見通すのに良いからだ。

私はコスモスを持つてきてくれた誰かに感謝したくなつた。ハワイで銀河を見ながら、ただ祈るしかなかつた私の思いが伝わつたように思えたのだ。

星空に線は引かれていない。人はあえてそれらを線ラインでつなぎ、意味のない空に秩序コスモスをつくる。銀河から光を受けとつた私がハワイで月を見やつた。同じ月を東京で見た母の気持ちは落ち着いただろうか。銀河によく似た秋の花を見た父は、そこに私のかげも見ただろうか。私にはそれらのすべてがつながって見えた。

あ!?

神山 規

一歳の君は、祖父とともに声をあげた。

桜の季節に生を享けた君は、ふたたび訪れた春に満一歳の誕生日を迎えた。その二週間後の日曜日、君は満開の桜の下の花莫蔭の上にあった。春風に吹かれて枝を離れた花びらは、車座となつて酒を酌み交わす私たちの頭上に、そして歩きはじめたばかりの君の頭上に舞い降り、一瞬の桜色の髪飾りとなつては消えて行つた。よちよち歩きの君は、カタコトを発しながら、花莫蔭の上を歩いたり、這つたり、座りこんだりして、皆に愛嬌を振りまいていた。ひとしきりはしゃいだ後、君は急に座りこんで、真剣に何かをし始めた。木々を離れて舞い落ちてくる桜の花びらを、拾い上げるつもりのようなのだ。君の幼い指の動きでは、花びらをくしゃくしゃにしてしまつて、なかなかうまくいかない。

花びらをつまみ上げることに、君は熱中している。花莫蔭の目の間に刺さりこんだ花びらならつまみ上げることが容易なようで、そのコツを呑みこんだらしく、つまむほうはなんとか形になつてきた。あとは運ぶだけだが、酔っぱらいのような足取りでは、心もとない。

何度目かの挑戦で、酒を酌み交わす、私と祖父の座るところまでやって来た。もう少して到着、というところで、またまたペタンとお尻をついてしまった。その勢いで君の指を離れて空を舞つた花びらが、偶然私と祖父の隣席に座る同僚の持つコップの中に収まつた。

「あ!？」私と祖父がまずそのことに気づいて声をあげ、君もそのコップを指さして声をあげた。普段は色白の顔を、好きな日本酒で真っ赤に染めた同僚が、「いい花見酒になった」と、ほめてくれ、頭をなでてくれた。

有頂天になつた君。花莫蔭のあちこちから桜の花びらをつまみ上げて、みんなのもとへも運ぼうとした。みんなのほうも事情を心得たもので、それとなく君の方に、にじり寄りつてくれたり、自分の持つコップを、君の手もとにさりげなく近づけてくれたりした。

そんなふうにして君は花びらを運び、結局、お酒あり、ジュースあり、ビールありの皆のコップの中には、丸まつたり、くしゃくしゃになつた桜の花びらが、浮かぶことになった。

私のコップの中に花びらを入れようとする君の指先を見た。親指と人さし指とを上手に対立させて、柔らかな花びらをつまんでいた。君の二本の指の間にはさみこまれた、淡紅色をした桜の花びら。君のふつくらした指先の、小さな可愛らしい爪も、やはり桜色。双子の桜の花びらだ。酔眼で見つめていた二つの桜色は、やがて溶け合つて一つの色になり、花見の心地よい眠りを桜色に染めていった。

二歳の君は、父とともに声をあげた。

港町の中心部にある駅を発車した一両きりのディーゼル車が、海に向かって落ちこむ、傾斜のきつい尾根筋に敷かれた線路の上を、高原にある隣町の駅を目指して、少しずつ高度を稼ぎながら、走っていた時のことである。

溪谷の桜は、まず日当たりのよい頂上付近からほころび始め、そこだけが「雪洞」を灯したようにほんのりと淡紅色に色づく。日毎に雪洞の灯の数が増えてゆき、尾根筋から始まった淡紅色の灯のリレーは、気温の低い溪底に届いて、満開のゴールテープを切る。

線路脇のわずかな斜面に植えられた桜のつぼみは、車両が高度を上げていくにつれてほころんでゆく。車輪を軋ませながらカーブを曲がる度に、開いた桜の花の数は増えてゆく。

そろそろ満開となった木々が現れる頃合いを見はからって、一両車の窓を開ける。車両の巻きおこす風に促されて枝を離れる花びらが車を包みこみ、車内にも舞いこんでくる。

ちようどその時、二歳の君は私の隣に座って、町で買って来たうぐいす餅の包みを開いていた。その柔らかな頬に、そして、小さな掌の上にのせたうぐいす餅に、花びらがふりかかる。君の桜色の頬に張り付いた花びらは、たちまちのうちに溶け合っつてひとつの色になる。中に包まれた餡の黒色が透けて見える、うぐいす餅の牛肥の緑色に重なった桜の花びらは、緑の草原に立つ一本桜のように、くつきりとした桃色をしている。

満開の花叢をかすめてコトコト走る列車の開いた窓から、君は顔をのぞかせた。右手を伸ばして、車窓に垂れ下がってくる桜の花にさわろうとした途端、左手に持ったうぐいす餅が、君の掌を離れた。

「あ!？」鳥のようにふつくらした横腹のうぐいす餅は、若草色の粉を撒きながら満開の桜の花の中に消えて行った。瞬間、草色の斑点のある小鳥の翼が見えたような気がした。

四歳の半ばを過ぎた冬の日、君は急に天国に旅立った。夜の底が抜けたように、空の暗がりの中から、つぎつぎに粉雪が湧き出し、いつまでも地上に舞い降りていた。空の星がすべて雪に姿を変えて、地上に降り積もっているように思われた。

あの日から二十年。私の心の時計は、いまでも桜色の時を刻み続けている。

あの日の誓い

群馬県高崎健康福祉大学高崎高等学校

秋山 瑞希

彼女の純粋な眼差しを見ていると、大好きな中原中也の詩の一節が頭に浮かぶ。

『この小つちな脳味噌のために／道の平らかならんことを…』

この子を守るだけの力が欲しい。一刻も早く精神的に自立した人間になりたい。そんな想いから、迷い焦っていた時期があった。自分の至らなさに苛立ち、ささくれだっていた私の心を癒してくれたのも、いつもそばに居てくれる、尻尾が生えた末っ子の愛らしい姿だった。

中学校に入学し、ようやく新しい環境に慣れ始めた頃の出来事だ。晩春とはいえ、やはり朝夕は冷え込む。部活帰りの夕間暮れに、背中を丸めながら家路を急いでいると、風の音に混じって何処からか小さな鳴き声が聞こえた気がした。もし友達と連れ立って歩いていたら、聞き逃してしまったであろう弱々しい声だ。

周りを見渡すと、通い慣れた通学路の景色には不相応と感じる籐籠が置いてあり、その中で子猫が震えていた。私の手のひらより小さく、まだ目も開いていない。母曰く「捨ててはいけない時期に棄てられた猫」だった。

今にも消え入りそうな、あまりに儂く無防備な命を前にして、私は只々、狼狽えるばかりだった。そして気付いた時には子猫を抱いて家へと走っていた。私に出来ることは、泣きながら母に助けを乞うことだけだったからだ。

我が家にはすでに4匹の猫が家族として暮らしており、出処はすべて捨て猫や野良猫だ。無断でまた子猫を拾ってきてしまった私は、ひよっとしたら叱られてしまうのではと、身を硬くしたのだが、母にとつての最優先事項は、私に小言を言うことではなく、目の前にある小さな命を救うことだった。

母はすぐに、猫用のミルクと哺乳瓶を買いに走り、子猫を育て始めた。知り合いの獣医さんに相談すると「生まれたばかりの猫は子猫同士で団子になって体温が下がるのを防ぐので、一匹では死んでしまう」と言われたらしい。

それから母の奮闘が始まった。お湯を入れた小さなペットボトルをタオルでくるみ、子猫の周りを囲むように配置して、夜中であろうと数時間置きにお湯を入れ替える作業を毎日続けたのだ。タオルには兄弟猫の絵を描く念の入れようだ。

子猫を保護してから数日が経ち、命の危機を脱したと思われた頃、うやむやにしたまま胸に問えていた問いの答えを、私はためらいがちに母に求めた。

「この子、うちで飼えるかな…」

動物を飼うということは、最期まで命に対する責任を全うするということだ。母は生き物の世話に決して手を抜かない人だと知っていたので、家計への負担を子どもなりに気にしていたのだ。餌代はもちろん避妊手術や毎年の混合ワクチン、毎月投与するノミ・ダニの駆除薬、7才

を過ぎた猫には定期的な健康診断と、猫が一匹増える毎に本当に多くの費用がかかることになる。トイレ用の猫砂だけでも馬鹿に出来ない出費なのだ。

そんな私の気持ちも、母には全てお見通しだったのでろう。眠っている子猫を起こさないよう、首のあたりをそっと撫でながら、静やかに独り言のような声で母が言った。

「大丈夫。ペットが増えて、飢え死にした人なんていないよ。」

私は安堵感と、私の心配を見透かし、氣遣ってくれた母のやさしさに、思わず泣き出しそうになるのを堪えながら「名前は私が決めていいでしょ！」と、はしゃいでみせた。

献身的な愛育のおかげで、子猫はその後もすくすく育ち、4才の成猫となった今でも母の後ろを追って歩いている。普通の猫よりも、ひと回り身体が小さいメイ。少し気が弱く他の猫に馴染めないメイ。メイにとつて母親は人間である私の母で、いっしょに育った兄弟はタオルに書かれていた猫なのかも知れない。

今、小首を傾げ大きな瞳で私を見つめている彼女は、その心の奥底で何を想っているのだろうか。「この家に連れてきてくれてありがとう」と、感謝してくれているだろうか。それとも「おまえは何もしてくれなかった」と、無力だった私を蔑んでいるのだろうか。

矢車の音が空に響く季節になると、あの頃のことを思い出し、これまでの生き方を振り返って自分を戒める。あの日、命を運んだのは私だが、命を救ったのは母だった。私は母に、ただ命を丸投げしただけだった。

あれから私は変わったのだろうか。命に責任が持てる人間になりたいと切望し、涙したあの時から少しは成長できただろうか。

また会える日まで

福井県立武生商業高等学校 青柳 佑茄

彼岸花という花は、きれいな赤色で川側に凜と咲いている。小学一、二年生の私は、集団登校中によくみるきれいすぎる彼岸花に不気味さを感じていた。それは他の子も同じらしく、葉っぱや花をむしりとって遊んでいる子でさえも近づかなかった。そんな私に彼岸花の印象を変えてくれた一人のおばあさんがいた。

おばあさんとの出会いは小学三年生の秋だった。右足を骨折した私は、お年寄りが二人いる病室で入院となった。

「こんにちは、名前は？私はひなこです。」

初めての入院で不安になっていた私に声をかけてくれたのは、隣のベットにいたひなこおばさんだった。

「あおやぎゆうかです。」と不安まじりの声で答えると

「ゆうかちゃんか！よろしくね！」

そう言いながら、ベットから車いすに乗り移り、私に手をのばしてきた。私はしわしわの手を握り、挨拶をした。

入院したその日に緊急手術をした私の足はギブスで強く固定されていて自由に動く事ができなかった。夜の面会時間が過ぎると親は帰り、一人ぼっちとなった。暗くて怖くて寝つけない私に、ひなこおばさんは優しく中国の物語を聞かせてくれた。

「人は死んでしまうと冥界という場所に行くの。そこには彼岸花がいっぱい咲いていて道の外れに『忘川河』という河があるの。その河を渡るとき橋の入り口に『孟婆』という女性が立っていてその場所を守っているんだって。孟婆は橋を渡る人に一生の絆を忘れてしまうスープを飲ませるんだって。」

「なんでそんなことするの？」

私はひなこおばさんの話を遮って、そう聞いた。

「生まれ変わったときに、過去の記憶が無くなって安らかに来世に転生できるからだよ。でもね、記憶を忘れないようにスープを飲まないで来世に転生する人もいるんだって。その人はね、氷みたくに冷たい忘川河の水の中で千年もの月日を過ごさなきゃだめなの。その試練を受ける人に孟婆はえくぼのマークをつけるの。『どんな過酷な試練を受けてでも、愛する人にもう一度会いたい。』そんな想いがこのえくぼに込められているんだって。」

ひなこおばさんは自分のえくぼを人差し指で触りながら話していた。小学三年生だった私には少し難しい話だったが、なぜか気に入っていた。それから毎晩ひなこおばさんからその話を聞きながら眠りについていった。

それから一カ月、私は退院間近になっていた。その日は少し肌寒く、空は雲一つない快晴だった。一通りリハビリが終わったのはお昼過ぎ。病室に戻ると、ひなこおばさんのベットの周りをたくさんの人が囲んでいた。妙に静かな部屋にピピッと一定のリズムを刻む機械音と、鼻をす

する音が響き渡っていた。幼なかった私でもその状況はよく理解できた。その数時間後、ひなこお婆さんは天国に旅立った。「お母さん帰ってきて！」「戻ってこい！」ひなこお婆さんの家族は声を荒げながら泣いていた。私の頬にも涙が流れ、気がついたら枕に顔を伏せていた。

「ゆうかちゃん？」

両頬にえくぼをつけた優しい男性が立っていた。

「女房がお世話になったね、ありがとう」

泣き腫らした目で私に笑いかけた。私は何回も首を縦に振った。

「これ女房が何かあったらゆうかちゃんに渡してって。じゃあね、ありがとう」

渡されたのは、水玉模様の封筒だった。

「ゆうかちゃん、私は冥界に行くてくるね。あなたのことを孫のように思っていたの。きっと忘れることはないわ。スープを飲まず、千年頑張るね！これから楽しいことも辛いこともあるかもしれないけど、強くまっすぐ成長して行ってね。見守ってます。本当にありがとう。」

そう手紙に書いてあった。涙で文字が歪んでみえる。私にとつてひなこお婆さんは、遠くにいる祖母の代わりだった。悔しくて悲しくてたまらなかった。手紙をしまおうとすると裏面に綺麗な彼岸花が書かれてあった。ひなこお婆さんのあのしわしわで小さな手で書かれた彼岸花は、とても温かく感じた。

あれから九年。彼岸花を見て、ひなこお婆さんを思い出し久しぶりに手紙を読んだ。最初の頃より折り目が汚くなった手紙が、時の流れを感じさせる。ふと花言葉を調べた。

「また会える日まで」

九年の時を超えて、想いが伝わった気がした。今日もまた川沿いの彼岸花を見て、ひなこお婆さんを思い出す。今もどこかで笑っているだろうか。また会える日まで。



お弁当と

福井県仁愛女子高等学校 森川 晴歌

「私、もうお父さんの作った弁当も、お父さんが買って来た弁当箱もいらない!。」  
私には母がない。そのせいか、父さんが作るお弁当はいつも肉だらけで、通称「茶色い弁当」なんてよばれたりした。しかも、弁当箱も父さんチョイスで、女子高校生が持つような弁当箱ではなかった。別に、弁当のことで何か言われたりするのが気にならないと言えば嘘になるが、毎日仕事で忙しいのに弁当を作ってくれる父さんに、もっと凝った弁当にしてなんて言えるわけもないし、それに、父さんがつくる料理はとつてもおいしいから、何かいわれても笑ってごまかした。しかし、友達の色鮮やかで、可愛い弁当をみると、羨ましいと思わずにはいられなかった。

去年の七月頃のある一日のことだった。その日は先生に質問があつて、私は少し遅れて昼ご飯を食べる予定だった。高校に入るまで学校で居心地の良い、安心できる場所なんてなかった。信頼できる友達はいたが、クラスも違い、一緒にいれる時間は少なかった。大抵は一人でこのグループにも入ることはなかった。そんな私が今向かっている場所は唯一、一緒にいたい、そう思えた場所だ。はやく皆と話したくて滴る汗も気にせず無我夢中で階段を駆け登った。五階分も。やっと教室に辿り着き、扉を開けようとしたその手が動きを止めた。

「森川ってなんであんな戦時中みたいな弁当箱つかってるんだろってうね。」

「うーん。まあ、なんで弁当箱をビニール袋に入れてるんだろって思う。」

「あーわかる。しかもいつも肉ばっかだし。」

一瞬誰の事を話しているのかもわからないに混乱した。皆がああ場所が偽物なわけがない。嘘だと、自分の聞き間違いだつたと、そう思いたくて勢いよく扉を開けた。いつも通りな見慣れた風景が私を絶望にまでつき落とす。ああ、こいつらは人ではない、悪魔だつたのだ。これまで過ごした時間もなにかも偽物だつたのだ。心の中が黒く染まっていくのがわかつた。私を見つめ笑いながら話しかけてくる姿に以前のような満悦感を得られなかつた。私は持っていたノートで悪魔の頭を叩いた。私は元々短気だ、それでも誰かに向かって暴力を振るうことは一度だつて、なかつた。午後の授業も好きなアニメの話も全て右から左に流れていった。この世界に私の居場所はないのだろう、そう思った。

家に帰るとめずらしく、父さんが先に家に帰ってきていた。

「ただいま。」

その暗い声に私は今の自分の心情を再確認させられた。

「どうした。学校でなんかあつたんか。」

機嫌が良いのか、のんきそうに明るく話しかけてきた父のその一言が私の心にとどめを刺した。

「父さんには関係ない!。大体、父さんが変な弁当箱買ってきたり、変な弁当つくったり、弁当箱にビニール袋かぶせるなんて意味がわからないことするからでしょ。もう父さんの弁当なんていらなから!。」

言った後、私はすぐに後悔した。それでもその時私の心には他人のことまで思いやってあげられる余裕なんてなかった。

逃げるように自分の部屋に入り、お気に入りのあるかの抱きまくらを抱きしめながら、誰にも気づかれぬように、ひっそりと泣いた。心は悲しみや怒り、後悔、そして、寂しさが混じりあい、ぐちゃぐちゃだった。

翌日、重い足どりで教室に向かう。改めて考えてみると、昨日したことに対し罪悪感を感じていた。それと共に、もう私にとっての大切な場所はなくなってしまったのではないか。色々なことを悶々と考えていたら教室についていた。じわりと汗ばむ手でゆっくりと、扉を開けた。その時、

「森川！」

今、誰かがはつきりと私の名前を呼んだ。

「森川、昨日はごめん。別に森川ならこういうこと言っても気にしないでくれるって思ってた、本当に陰口とかじゃなくて、森川が怒ってるの凄くわかったし、そりゃ頭もちよつとは痛かったけど、森川の方が辛かったと思うから、本当にごめん。」

焦りながら早口に、でも私のことを真つすぐに見て言う姿に思わず笑ってしまった。今まで何をここまで悩んでいたんだろう、やっぱり今日、学校に来て良かった。そう思いながら私もごめんと言った。

家に帰ると、父と妹が玄関で待っていた。

「お姉、弁当箱買いにいくんですよ。」

そう言った妹の言葉に父さんが優しく笑っていたから、私も笑った。妹チョイスの可愛い弁当箱を買い、その後向かったスーパーで父さんは、

「明日の弁当のおかず。」

と言ってブロッコリーを買っていた。

目を閉じるということ。

福井県立藤島高等学校 山岸 凜汰

瞼がゆつくりと下りてきて、頭のどこかで終演ですよ、という声がする。

自分自身では見ることの出来ないものに興味を感じたり恐怖を感じたりすることは、人間の元来の性質なのかも知れない。誰しも、幼い頃はベッドの下に怪物が潜んでいるのではないかと疑い、髪を洗い流している時に自分の背後に何かがいるように感じたことがあるだろう。学校では世の中には未だ説明されていないことが沢山あると教えられ、人々は今日も新聞を見て、不確かな未来への不安や期待を抱く。目を閉じている時、世界はどのようなになっているのだろうか。

私たちは目を閉じている間、驚く程に無防備で酷く弱い。一時的に世の中から隔離されてしまい、残るのはただ自分の中の世界のみだ。私はそれがとてつもなく嫌いだった。

人生のうち全ての瞬間をその目で捉えることが出来たとして、世界中の約何パーセントを見たり知ったり出来るだろうか。もしかすると、私たちの多くは自分たちの人生に影響を与えるはずであった物事を見ないまま最期を迎えるのだろうか。私たちに出来ることが出来ない場所に私たちの真の居場所があるかもしれないというのに。そう思うと、激しい焦燥感に駆られた。もっと、もっと、目を開いていなければ、と。

だから夜更かしは好きだった。勿論、身体に害があること、特に言えば、私の身長が伸び悩んでいることも睡眠不足が原因だということは百も承知だった。しかし、皆が寝静まった後の世界は今起きている私にしか分からないのだ、と思うと無性に嬉しかった。特別感とか優越感とでも呼べば良いのだろうか。

私は大のおばあちゃんっ子だと思う。今でこそ休日は部活や模試で埋まってしまっただけであまり行っていないが、小学生の頃は毎週日曜日は必ず祖母の家に遊びに行って本を読んだり外で遊んだりしていたものだ。祖母といると彼女の長年生きてきた中で培った精神力を目の当たりにすることが出来るし、何より温かい気持ちになれる。

祖母の家には仏壇があるのだけれど、僕はいつも祖母の家に行くときまず初めに、仏壇の前に置いてある小さい座布団のようなものの上の金色の茶碗を軽く二回たいて、掌を顔の正面で合わせて仏様を拝む。何故座布団に乗っているのか、それほど茶碗が偉いのか、そもそもあれは茶碗なのか、と小学生の私には謎なことが多かったが、当時の私はそんなことより早く遊びたいという気持ちの方が強かったのだろう。お偉い御茶碗様は、高く良く響く音を鳴らして、私はずっと目を閉じて南無阿弥陀仏と繰り返すだけだった。

ふと思えば、祖母に、何故合掌をしている間は目を閉じるのか、と訊いた。祖母は初め突然あたり前の事を訊く孫を怪訝そうな面持ちで見ているが、しばらくして「目え閉じて浮世のことを全部仏様に放ってしまっただけなことやらどうしようもないことやらから救われたらいいのよ。理由なんぞねの」と答えた。さらに続けて「ほら、目細むと、普通に目開いてるよりよお見えるやろ。瞼閉じてけば閉じてくほどよお見えるんやわ。目完全に閉じてても、それは仏さんの目えとおんなじになって、目開いてた時には見えんかったもんが見えるようになるんやがの。し

らんけど。」とも言った。彼女の臆測であつたらうとは思うけれど、私はその説明がすとんと心にはまつて妙に納得してしまつた。

その夜、祖母の家から帰つたあと私は夜更かしをしなかつた。ベッドの上で目を閉じるとどんな体の輪郭が曖昧になつて、確か仏様を宇宙と同一視する人々もいたはずだつたな、などと思ひながら、暗い宇宙に体を放り出されたような気分浸つた。

目を閉じるということは別に私が思つていたようにより良い人生から逃げているわけではないと知つた。よくよく思い返せば、人々が目を閉じる理由は消極的なものばかりではない。神や仏への祈りはむしろより良い生活を願うものであるし、良い香りを嗅ぐ時に目を閉じるのは、その香りを満喫するためだ。笑う時、自然に目が閉じてしまうことすらある。

目を閉じることで見えるものもある。そう祖母に教わつた。だから私は今でもよく目を閉じて思ひに耽る。

一日が終わつて、疲れたけれど楽しかつたことを思い出す。まるで毎日が自分を主人公にした劇のように思える。それはたまに喜劇であつたり悲劇であつたりもするのだけれど。

瞼がゆつくりと下りてきて、頭のどこかで終演ですよ、という声がする。自分の声だ。

明日への期待と不安を胸に抱きながら目を閉じた私は、きつと宇宙だと思ふ。

木漏れ日が差す道

福井県立高志高等学校 鱒淵 奈美

澄みきった風が心地いい。温かい木漏れ日は、私がこれから歩いていく道を照らしている。それは、まるで道しるべのようだった。

中学二年生の私と父は登山をしに山のふもとまで車を走らせていた。登山をしようと言いだしたのは父からで、実を言うと私は面倒だと思っていた。「登山なんて、疲れるだけなのに。」そう思っていたのだ。朝早くに出発したということもあり、私は車内で寝たり、ゲーム機で遊んだりしていた。父と話すことはなかった。

私の父は優しくもあり、そして厳しかった。怒るととても怖い父と、一緒に登山なんてできるのだろうか、とも思った。登山は一度だけ父と経験したことがあったが、今回の山はわけが違う。以前登った山の倍近くある高さだった。そのときの私は、無事にここに戻ってくるができるか、ではなく、登山中に父と何を話せば良いか、ということを心配していた。

そしてついに登山口まで着いた。「一步踏み出せば、もう後戻りはできない。」一緒に行くと言ってしまった時点で後戻りできないことなんて、私が一番分かっていたのに。

最初はコンクリートで舗装された固い道だったが、進むにつれて、やわらかくひんやりとした地面になった。沈黙が気まずいと感じながらも、風が吹き、木の葉が奏でる音や、時折聞こえる鳥の声、山特有の空気感に私はうっとりとして歩いていた。

「最近、どうなんや。」

突然父が口を開き私は驚いた。

「どうって、普通に、楽しいよ。」

漠然とした問いにどう答えて良いか分からず、私はそっけない言葉を返した。

「そうか、それは良かったな。」

さっきより沈黙が気まずい。せっかく気持ちが良かった空気が父のせいでも台無しだ。そんなことを思いながら再び沈黙に包まれた。やっぱり、事前に話す内容を考えておけば良かったのかもしれない。

さっきまでゆるやかだった斜面が次第に急になってきた。階段が多くなり、崖をロープでのぼらなくてはいけない場面も出てきた。父は、私が急な所を登ろうとする度に

「大丈夫か。」

「気を付けて登らなあかんぞ。」

と声をかけた。「私はまだ若いし、こんな所平気なのに。」そうは思っても、口には出せなかった。

急斜面が多く、長い時間歩いていたということもあって、疲れが出てきた。私は、その疲れと、本当に山頂までたどり着くことができるのかという不安からイライラがつのり、こんなに自分がいらついているのも、いつまで歩いても山頂に着かないのも、全部父のせいだ、と自分の焦りを心の中で父にぶつけていた。そして、早く父との二人の時間から抜け出したいという一心でどんどん歩くペースが速くなっていった。

そのときだった。私は足がもつれて、足をひねって転んでしまった。骨折したわけでも捻挫したわけでもないのに、何故か涙が溢れて止まらなかった。

私が足首をおさえてうずくまっていると、後ろから来た父が私のところへ来て言った。

「何を焦ってるんや。なんも焦ることなんてないんやぞ。ゆっくり歩いてけばいいでな。立てるか。」

私は涙をぬぐって、父の手を借りながら立った。しばらくの間涙は止まらなかったけれど、父はまた黙ったまま、私の隣をゆっくりと歩いてくれた。

何故痛くもないのに涙が溢れたのか、何故父の言葉を聞いたあと涙が止まらなかったのか、そのときは分からなかったけれど、きっと、自分のことをかっこ悪いと思う気持ちと、そんな私を見て「焦らなくてもいい」と言ってくれた父からなのだろう。

それから、二人で歩いてしていると次第に話すことが増えていった。ぎこちない会話だったけれど、一つ話をする度に距離は縮まっていた。

私は、初めて雲の海を見た。それはとても綺麗で、一生忘れられない景色だった。疲れはどこかに飛んでいき、その美しさに息をのんだ。温かい涙が頬を伝っていく。

「そろそろ行くぞ。」

私は父のいるところへ走った。来た道に戻ることに抵抗はなかった。

「お父さん、待って。」

木漏れ日が差すその道へ、私は踏みしめた。それは、私の新しいスタートだ。

友達という存在

山口県立山口高等学校通信制 井林 美沙

あのとときの私は周りを見失い、ただ生きる意味を探し求めていた。

あれは、今から2年程前、高校に通い始めて半年ほどたった頃。私那不登校になった時のことだ。きっかけは些細なことでの友人とのすれ違いだった。そこから、浸食されていくかのように、私を取り巻く環境は変わりはじめ、積み上げていた人間関係は崩れていった。視線や声突き刺さる。時が経つにつれて、教室で息が出来なくなった。その時を境に、私と昼食を共にしていた友人は、挨拶すら交わさないう他人になってしまった。私は、その現実に立ち向かうことが出来ず、家に閉じこもった。心にあるのは、「これから何を目標にしたらいのか」「何のために生きていくのだろうか」そればかりだ。どんどん過ぎ去っていく日々は、私だけを置いていくような気さえる。生きていくことの意味をひたすら問う。そんな毎日が続いた。

数日経つても、答えを見つけれない私は「もうこれしかない」と思うようになった。それは自分で命を絶つことだ。私の心は限界だったのだと思う。それ故、許されない行為に手を染めることを厭わないようになっていた。そして私はそれを実行に移す。「恐れることはない」と思いながらも、震える手で何度も包丁を手にした。だが、その行為を何度やっても、変わることは何もなかった。私にはその一線を越える勇気が無かったのだ。ない方がいい勇気なのだが、このときの私はその勇気を持っていないことに、ただ涙した。

そんな私に新しい道が見え始めたのは、秋も深まる晩秋の頃。担任に「通信制の高校に通ってみないか」と勧められたのだ。初めて耳にした通信制という言葉。聞けば生徒は皆、年齢にかかわらず、様々な理由を抱えて通っているのだという。また、私と同じような理由で通っている人もたくさんいるということだった。家に閉じこもってばかりで「このままじゃ駄目だ」と思っていた私は、思い切つてその通信制に行くことを決意した。その年の単位を取得出来なかったため、翌年、再度一年生として高校生活を始めることになった。やり直すに当たって、一つ学年が下があれば、周りは年下ばかりということが嫌だったが、通信制では年齢がバラバラのため浮くことがない。これは、私にとって何よりの救いとなった。私は、半年で塗り替えられてしまった友達のイメージを一新するため、再スタートを自信に繋げるために、他の生徒に声をかけてみることを初日の目標として掲げた。

そして迎えた初めてのスクーリングの日。私はドキドキしながら、たまたま席が近くだった子に話しかけた。その子は私より一つ年下の子で、私の緊張とは裏腹に優しく返してくれた。あの時は、とてもホッとしたことを今でも覚えている。私が年上ということもあり、私たちの関係は敬語をやめるといふことから始まった。それから、スクーリングで会うたびにどちらともなく話しかけ、会話を重ねるようになり、夏が来る頃には年下年上という枠を超えて、同級生のごとく打ち解けていた。また、レポートやテストをしていく中で、挫けそうになった時は、二人で支え合い励まし合いながら努力を重ねた。その甲斐あって、お互い単位を修得することが出来た。そ

うした日々の中で、自分の過去や抱えている悩みを打ち明け、共に理解しあった。こうして、たまたま話しかけたその子は、今では親友と呼べるほどの存在となった。

この不登校の経験は私にあることを教えてくれた。それは、友達は数ではないということだ。これまで、新学期になると友達をたくさん作らないといけないという思いに押され、焦る自分がいた。だが、友達を作る上で大切なことは、人数ではない。お互いがちゃんと理解し合えて、思い合うことの出来るような唯一無二の存在。そんな人を一人でもいいから見つける。それが大事なことだ。そういう存在が一人でもいるということが、その人にとって多くの力になるだろう。

辛い過去を生きたからこそ、私の充実した今がある。生きて自分という存在を未来へ残す。これが生きる意味だと思ふようになった。この3年間、友達について色々なことを学んだ。私が傷つけられたのは友達。しかし今、この学校でよき親友となっているのもまた友達である。友達という存在は、良くも悪くも自分に影響してくるものである。そして、その関わり、影響を通して人は成長することが出来る。自分を隠して、相手に合わせるだけでなく、思い切って自分をさらけ出してみる。そうすれば、案外近くに気の合う人はいるかもしれない。私は過去の自分のように友達との関わりに臆病になっている人に伝えたい。友達と関わることを恐れず、諦めないでほしいと。



偉大な祖父

福井県立武生商業高等学校 角上 祐介

ある休日の朝、私と祖父は無言で向かい合って座っていた。網戸の外から金木犀の香りが部屋いっぱい立ちこめる。そして注ぎ込んだ日差しは将棋盤を照らした。

私は祖父の影響で、小学五年生の頃から将棋を始めた。将棋とは、自分の駒を動かして、先に王将という駒を取った方が勝利するというゲームである。一見単純そうに見えるが、駒にはたくさん種類があり、その一つ一つが違う役割を持っている。駒の特性を活かしてゲームを進めていかなければならないので非常に頭を使う。祖父とは今までに何百回と将棋をしているが、未だに勝つことがない。祖父の動きには隙がなく、なかなか攻めることができない。そうやって足掻いている内に自分が攻め込まれて負けてしまう。私が負けた後、祖父はいつも一言、「前より強くなったなあ。」

祖父に褒めてもらえるのは嬉しい。しかし、毎回あっさりと負けてしまうから本当に強くなっていくのか分からなくなる。普段はお酒を飲んで寝ているだけなのに、将棋をしている時の祖父はとても大きく感じる。私はいつになったら祖父に一泡吹かせられるのか、そう考えている内に二年、三年と年月が過ぎていく。祖父は今年で喜寿を迎える。以前より部屋で寝ている時間が多くなり、祖父と顔を合わせる時間も少なくなった。このままいくと一回も勝てないまま、祖父に先立たれるかもしれない。そんな危機感すら感じるようになってきた。それまでにはなんとかして一勝したい。そんな思いでこの日は勝負に臨んだ。

将棋には、戦局を左右する二つの駒がある。

“飛車”という駒と“角行”という駒である。飛車は、縦と横なら自由に動かすことができ、角行は斜め方向を自由に動かせる。この二つを上手く使えば、有利な状況を作ることができる。しかし、迂闊に攻めすぎれば相手の駒に取られてしまう。将棋には、相手から取った駒を、自分の駒として使うことができるというルールがある。そこが将棋の面白いところなのだが、もしこの二つの駒を取られた場合、もう祖父を止めることはできない。今回はそうならなかったために、序盤は飛車と角行を自分の陣地に待機させ、それ以外の駒でじわじわと攻めていくことにした。

対局から一時間が経過した。戦局は未だに拮抗しており、なかなか攻めることができない。このままだと相手の流れに持っていかれてしまう、と思った次の瞬間、祖父の手に若干の隙が生まれた。その場所は飛車の射程圏内で、ついに私は祖父の陣地に攻めることができた。攻めに行っていた祖父はいきなりの奇襲に対応することができず、完全に自分の有利な状況を作り上げることに成功した。そして三時間に及ぶ激戦の末、ようやく祖父に勝利することができた。しかし、それでも私は喜ぶことができなかった。祖父は将棋の要となる飛車と角行なしで対局していたからだ。私は全力を出している祖父と対局がしたかったので再戦を申し込んだが、疲れて眠いと断られてしまった。気が付けば、時計は午後五時を回っており、辺りは夕焼けで染まっていた。

将棋盤の片付けをしていると、祖父が隣のリビングでお酒を飲み始めた。三十分も経てば酔いが回り、よく喋るようになる。そしていつものように私を呼び出しこう言う。

「俺が死ぬまでに俺の楽しかったことをお前に伝えてやる。」  
祖父には昔からいろいろなところに連れていってもらった。そのどれもが魅力的なものばかりだった。将棋もその一つで、駒の動かし方など、多くのことを学んだ。だからこそ祖父は私に倒されたいと思っているにちがいない。祖父が味わいつくしたものを全てを経験していきたい。

「だれじゃ」

福井県仁愛女子高等学校

片山 七海

私は週に一度、おばあちゃんの家へ行く。田舎に住むおばあちゃんは車を運転することができない。だからお母さんが車を出しておばあちゃんを買い物に連れて行く。おばあちゃんの買い物は長い。一時間程かかるときもある。カゴ一杯に食べ物を詰め込み、それでも足りず、カゴを二個使うときもある。もちろんおばあちゃん一人でこのたくさんを量を食べるわけではない。おばあちゃんの家にはおじいちゃんもいる。たくさんものを食べる元気なおじいちゃんだ。

私はいつもおばあちゃんの家に行くときにおじいちゃんに挨拶をする。おじいちゃんに挨拶をするときはいつも緊張する。なぜなら私が挨拶をすると

「だれじゃ」

と聞くからだ。私は「あなたの孫ですよと言う。そうするとおじいちゃんは「お、大きくなったの」と言う。一週間前にも来ているのに会うたびにこの会話を繰り返す。私が一週間ごとに大きくなっているわけではない。おじいちゃんは認知症と言う病気なのだ。

おじいちゃんの頭の中ではきつと私は三歳くらいで時が止まっている。だから私のことを時々お母さんと間違える。お母さんの名前は友子だ。私に向かってお母さんの名前を呼びかけたりする。前にお母さんと私で横並びにおじいちゃんの前に並んでいたときに、おじいちゃんが「おお、友子が二人いる。なんでじゃ」と言った。私がイタズラで「どっちが友子でしょう？」と聞いたら、おじいちゃんは「ううん」と悩んで「こつちか！」と言いながら私を指さした。お母さんは笑っていたけれど、私はショックを受けた。おじいちゃんは自分から私の名前を言ったことがない。おばあちゃんが七海ちゃんと言うと、おじいちゃんは「七海ちゃんか」と言うけれど、きつと私の名前を忘れてしまっているのだ。今の目標はおじいちゃんに私の名前を覚えてもらうことだ。

また、おじいちゃんは足が悪い。杖がないと歩行が困難だ。私が歩くと五秒ほどでつくトイレもおじいちゃんは十分ほど時間がかかる。おばあちゃんがその負担を心配して、業者の人に頼んでポータブルトイレを借りた。わざわざトイレまで行く手間がなくなった。初めてポータブルトイレを見たおじいちゃんは「なんじゃこれ」と言った。私が説明すると、「おおくなるほど。病気の人が使うやつか。」と言った。私は心の中で「おじいちゃんが使うんだよ。」と言った。五分ほどしたらまたおじいちゃんは「なんじゃこれ」と言った。今度はめんどくさくなってほっといた。

一週間後にまたおばあちゃんの家に行った。おじいちゃんは杖をつけて、遠い方のトイレへ向かっていた。ポータブルトイレは一回も使っていないらしい。おじいちゃんはポータブルトイレに向かって「なんじゃこの邪魔なの」と言った。おばあちゃんは呆れていた。でも最近では少しずつポータブルトイレを使うようになってきた。また奥のトイレまでいってしまうときもあるけれど。また、私を見ても「だれじゃ」と言うことはなくなった。これからもっとたくさんおじ

いちゃんとコミュニケーションをとろうと思った。いつかおじいちゃんから七海ちゃんと呼んでくれる日がくることを願って。

最近またおじいちゃんと話した。おじいちゃんは私に向かってこう言った。

「おまえ会ったことあるんけな？」

もう「だれじゃ」以前の問題になってしまった。

私には、一つ上のお兄ちゃんがいる。でも、お兄ちゃんは障害を持っている。私が生まれた頃に、両親はそのことを知ったそう。私は、お兄ちゃんが障害を持っているということはあまり聞かされなかったけど、一緒に暮らしていく中で日に日に感じていった。お兄ちゃんとは保育園までは同じ所に通っていた。でも、小学生になって私は地元の小学校、お兄ちゃんは特別支援学校に通うようになった。通っている学校は違うけれど、土日はいつも一緒に遊んだり、出掛けの時はいつも手を繋いで歩いたりしていた。私は、少しでもお母さんの負担を減らしてあげたくて、お兄ちゃんの世話を手伝ってあげた。そんな毎日が、今現在高校二年生まで続き、お兄ちゃんには高校三年生だ。今まではほぼ喧嘩をする事もなく、普通の兄弟とは違う。けれど、これが私のお兄ちゃん。私にとって普通の兄弟なのだ。

最近、二人で散歩に出掛けるようになった。自宅の周りが畑や田んぼが多いため、農道を歩くことが多い。ある日、私はスーパーへ行きかけたから、お兄ちゃんと一緒に散歩しながらスーパーへ向かった。自宅からスーパーまで、自転車でも十分ほどかかるので、歩いて行ったらどのくらいかかるのだろうと思いつながら気長に歩いて行った。すると片道に三十分ほどかかってしまった。私は、「お兄ちゃん疲れてるやろうしな」と思いつて紙パックのジュースを二人分買って、お兄ちゃんと飲みながら、家へ帰った。その道の途中で、

「ジュースおいしい？」と聞くと

「お・い・し・い！」と返ってきた。

お兄ちゃんは普通に喋る事が出来ないから、いつも片言の言葉になってしまう。それでも私は、お兄ちゃんとうちやうって喋るのが楽しい。私が何か喋ると頷くか、返事を返してくれるから、そんなに喋れなくても会話は成り立っている。

「疲れた？」と聞くと、頷いてくれるし、

「暑いね」と言うと、

「あ・つ・い！」と返ってくる。

こんな会話をしながら、いつも散歩をしている。いつもなら三十分で終わる散歩もこの日は、一時間の散歩だった。その散歩をした日から三ヶ月後ぐらいに、お兄ちゃんの学校の懇談会があった。その時にお母さんが先生に言われたのが、

「妹さんはお兄ちゃんの事大好きでしょ？」

という言葉だった。その後と言われた言葉が

「お兄ちゃん、妹さんと散歩でスーパーに行つてジュースを買ってもらつて一緒に飲んだのがすごい楽しかったって言ってましたよ。」

と言われたそう。それを聞いた私は、嬉しくて泣いてしまった。ただ散歩に行つて、ジュースを買ってあげただけなのに、そうやって楽しかったって言ってもらえてすごく嬉しかった。お兄

ちゃんが、こういった思い出を楽しかったと言うのは初めてだったから、これからもまた一緒に散歩に行きたいと思った。

たとえ全然言葉が喋れなくても、思ってる事が全然分からなくても、一つ一つ一緒に過ごしてきた事を大切に思ってくれるのは、とても嬉しかった。きつと、お兄ちゃんは家族と過ごす一日を幸せに感じながら生きているのだろうと私は思う。多分、私がここまで幸せな日々を送れたのは、お兄ちゃんのおかげでもあると思う。今のお兄ちゃんじゃなかったら、また違った日々だったかもしれない。私のお兄ちゃんが今のお兄ちゃんでもよかったと思う。たくさん幸せをくれるお兄ちゃんが私は大好きだ。

ビー玉の少女

福井県福井南高等学校 守屋 佑香

肌寒くなりつつある秋の日。下校中、私の鼻をかすめた爽やかな甘い香り。

「金木犀……」

隣で歩く友達の呟きと、神社の敷地に立っている金木犀の木に気づいたのはほぼ同時だった。

「金木犀って、近くより少し遠くにある方が香るよね」

友達の何気ない言葉に同意しつつ、濃い緑の葉の中で点々と咲いている橙色の花を見た。

いくつもの小さな花びらたちが、丸く集まっている。色、形、香り。それらの要素は私にある光景を思い出させた。そして秋のさらりとした空気から、じめじめとした暑さである東南アジア特有の暑い夏へと、私の意識を連れて行ったのだ。

高校三年生の夏休み、私はカンボジアに一週間滞在していた。様々な場所へと訪れたが、その中でもシエムリアップにある寺子屋（子どもや大人が勉強を受け直す場所）を見学したときのことだった。

教室へ入るや否や、二十五名もの子どもたちが歓迎の歌を歌ってくれた。空気が大きく震えんばかりの歌声と、教室の入り口や窓から差し込む眩しい太陽の光。電灯もなければ扉や窓ガラスもない。しかし、壁に貼られた手書きの九九の表、方角を示す紙、カラフルな折り紙が子どもたちの笑顔にとっても良く合っていた。

同じ制服を着た子どもたちが授業を受けているのを教室の外から羨ましそうに眺めている人影を見つけた。緑色のワンピースが印象的な小柄な少女であった。

「えっと……、チョムリアップスオー（はじめまして）」

私は戸惑いながらも、現地の言葉であるクメール語で彼女に話しかけてみた。すると、耳を傾けてやっと聞こえるか聞こえないくらいの細い声が返ってきた。この寺子屋で学習ができるのは十歳からだという説明を受けていたので、この子は六歳か七歳くらいの年齢だろうと直感的に思った。名前を尋ねたが、一度耳にいただけでは聞き取ることができず、三度尋ね直したところまで何だか気の毒な思いをさせていると感じ諦めた。

校庭と呼ぶには小さい中庭をふと眺めると、授業を終えた子どもたちが青空の下で走り回っていた。彼女は寂しくないだろうか。私の隣で佇む少女の横顔と、同じ制服を着てじやれ合う彼らを見比べてそう感じた。何かコミュニケーションが取れるものは……。二人の間の沈黙が妙にじれつたくなって、私はショルダーバックから薄いノートと黒のマーカーを取り出した。キュッキュツとペン先を走らせ、その絵を少女に見せたと、閉じられたままだった口がふはつとほころんだ。その柔らかい表情は、私の胸をじんわりさせた。国も違う。文化も違う。言葉も通じないけれど、そのとき確かに二人の間には笑顔があった。走り書きされたイヌなのかクマなのかも分からないような私の絵も、なぜだか愛らしく思えた。

まったりとした時間も過ぎ、そろそろこの場所を離れる時間になった。彼女はこのひとときをいつか思い出すことはあるだろうか。相変わらず強い日に照らされながら、私はぼんやりと考えていた。何か思い出になるものは……。急に別れが寂しくなって、私はもう一度ファスナーを引っ張った。「はい」とオレンジ色に光るガラスを一つ少女に手渡した。日本の文化を紹介するために持ってきたビー玉が、ここで役に立った。

「チョムリアアップリアー(きょうなら)」

と挨拶を告げたとき、ビー玉を手の平で転がす彼女の姿が見えた。そしてそのまま鼻に近づけて、香りを嗅ぐような仕草を試みせたのだ。普通のビー玉は匂いなんかしない。そんな当たり前のことにさえ物寂しく感じて、何だかもやもやとしたものを心に抱えながら帰りのバスに乗り込んだのだった。

茜色をバックに、すっと引かれたような雲を見上げた。オレンジ色のビー玉の様に丸く集まった花びらたちは次第に地面へと落ちていく。あの笑い合った暑い夏の日も、彼女の記憶からすっぽりと抜け落ちて、いつかは消えてなくなってしまうのだろうか。名前も知らない少女。しかし、国境や言語を超えた先にある温かなものをきつと私は忘れない。

近くより遠く……。数分前、友達が口にした言葉を思い出した。それならば大丈夫。飛行機で七時間もあれば、日本からカンボジアへ移動することができるのだから。近くもないけれど遠くもない国。ビー玉では渡せなかった金木犀の香りが少女へ届いてほしいと願った。